

## 第5講：123「人がめどか」

## 1. はじめに

123「人がめどか」は、のちの船場大教会初代会長となった梅谷四郎兵衛にかけられた教祖のお言葉をめぐる逸話である。そこでは、人ではなく、あくまでも神様をめぐりにして通ることの大切さを、四郎兵衛が教祖から直々に教えられている。

『逸話編』に収められている逸話には、教祖と先人との関係性のありようが鮮明に描かれている場面が少なくない。そうした教祖と先人との具体的なやり取りの数々は、その時と場所の限定を超え、今なおよぼうの心にしみじみと伝わってくるものがある。おそらくそれは、そこから教祖の生き生きとしたお姿やお言葉と、それを実際に目の前に拝した先人との関係性の豊かさを、私たちも追体験してみたいという羨望とも言える感情があるからではないだろうか。ここではそうした関心から、この逸話を読み解いてみたい。

## 2. 梅谷四郎兵衛の生い立ちと信仰

梅谷四郎兵衛は弘化4年（1847）、河内国古市郡東坂田（現在の大阪府羽曳野市東坂田）に、久右衛門、小きんの三男として生まれた。入信は明治14年（1881）、自らの生業としていた左官の弟子、巽徳松の父親から教祖の話聞き、実兄の眼病（そこひ）のおたすけを願ってお屋敷へ参詣した。そこで聴いた取次の話に感動し、即入信したという。四郎兵衛35歳の時であった。

この入信の3ヶ月後には教祖から「明心組」の講名を拝戴し、大阪阿弥池和光寺へ布教の自由を求めて手続き書を、また明治17年（1884）には心学道話講究所天輪王社を大阪府に提出している。さらに明治21年（1888）には、教祖1年祭中止直後の教会設立協議に参加した。大正8年（1919）に73歳で出直すまで、四郎兵衛は「教祖第一、ぢば第一」の信念を貫き、教祖はもとより他の高弟らからも厚い信頼を得ていたと伝えられる。それは、彼の入信直後からの教会設置運動における立場の重要性からも窺える。四郎兵衛は生来やや短気な性格であったとも言われるが、逆に言えばそれは、教祖の教えに対する四郎兵衛の確固たる信念・信仰の証でもあろう。そうした四郎兵衛の姿は、周囲からは「純教理の梅谷」と称されるほどであった。

## 3. 「人がめどか、神がめどか。神さんめどやで」

この逸話は明治16年（1883）、四郎兵衛が「御休息所」の壁塗りひのきしんのため、お屋敷に詰めていたときの話である。自分に対する陰口を耳にした彼は非常に憤り、夜中に大阪に帰ろうとしたところ、教祖の咳が聞こえ、腹立ちも消えた。翌朝、教祖が語られた「四郎兵衛さん、人がめどか、神がめどか。神さんめどやで」というお言葉は、私たちよぼうのあいだでもよく知られているものだろう。

教内では一般的にこの言葉は、周囲の言葉や態度に惑わされることなく、神様を芯とした教えにもとづく心づかいをすることの大切さを説いた話として受け取られている。当然四郎兵衛自身も、このお言葉の意味自体は、頭ではよく分かっていたはずである。だがこの言葉を、教祖自身から直接かけられたことで、その意味合いの深さがしっかりと胸におさまり、心が定まっ

たのではないだろうか。教祖の咳払いが聞こえた瞬間に四郎兵衛の足がとまり、腹立ちも消え去ったという描写からは、教祖に対する彼の特別な信頼の姿勢が浮かび上がってくる。

## 4. 語る人への信頼

ここでもし、四郎兵衛がこの同じ言葉を、教祖からではなく、自分の陰口を言っていた人たちから言われたとしたらどうだろう。果たして彼は教祖に言われたのと同様にその言葉を素直に受け取ることができただろうか。私たちもこの状況を自分自身に当てはめてみると、それがいかに難しいことかが容易に想像できるだろう。「人がめどか、神がめどか。神さんめどやで」という言葉も、この教えそのものの意味はもとより、それを誰に言われたか、誰から説かれたかという点も非常に重要だと思われる。このとき大阪へ帰ろうとする四郎兵衛の足を止めさせ、また腹立ちを解消させたのは、教祖という存在に対する彼の確固たる信仰だったのだろう。それは、他の人間との関係性とは異なった次元にある、いわば絶対的な信頼であったとも言えるのではないだろうか。

## 5. 現身の教祖とそのお言葉

現身の教祖から直接頂いたお言葉だからこそ「胸におさまる」、ということ示唆する逸話篇はこの他にもある。137「言葉一つ」では、我が家で女房に対し腹を立てがちな榊井伊三郎に対し、教祖は「言葉一つが肝心。吐く息引く息一つの加減で内々治まる」と諭されている。もし伊三郎が自分の妻から直接この言葉を言われたら、彼はそれを素直に胸に治めることができただろうか。ここでも、言葉の力が、その言葉を語る人自身に対する信頼に深く依拠していると言えるのではないか。人の言葉が胸に響くのは、おそらくその言葉を語る側と聞く側との深い信頼関係があるからこそだろう。榊井伊三郎と梅谷四郎兵衛に共通していたのは、教祖へのこの絶大なる信頼であり、それこそが彼らの信仰の姿であったように思われる。

## 6. おわりに：信頼の延長としての信仰という視点

以上のような理解からすれば、人をめぐりにすることと、神をめぐりにすることの境界が曖昧になってしまうように聞こえるかも知れない。だがここで想起すべきは、心底から神様と信じられる現身の教祖が、四郎兵衛自身の目の前におられたという事実の意味である。私たちは、『逸話篇』に登場する先人のように、現身の教祖を現前に拝し、実際に言葉を交わすことはできない。いかに信仰的には同じ志を自覚していようと、これは先人たちと私たちとの決定的な違いである。

だが、現身の教祖を拝することができないという事実は、存命の理を教えられる私たちに、普段の生活の只中で、周囲の人々といかに繋がり、また共に生きていくかということ、逆に深く思索する契機を与え続けてくれるとも言えるだろう。『逸話篇』に描かれる教祖と一梅谷四郎兵衛のような一先人たちの関係性の中には、ある信頼の醸成が、信仰の芽生えから確信へと連なっていくありようを見ることができるよう思われる。